

フランツ・リストと聖エリザベト －第1部、フランツ・リスト、その6－

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル 粟 博志・高田 昌実・萩原 隆二
鹿児島大学 名誉教授 田島 紘己
加治木温泉病院 納 光弘
県立大島病院 夏越 祥次
粟 隆志

[はじめに]

前回の[4] ジョルジュ・サンド(2)に続き、今回もピアノ音楽史上、重要なショパンについて書くが、新しい試みとして、ショパン自身が自作曲を献呈した相手（ショパンの関心の深かった人物）とその時期に注目しながら

書き進めたい。

献呈は、客観的事実として、最も信頼性が高いと思われるからである。

なお本稿では、3つの付録を設けた。読者の基礎知識の一助となれば幸いである。



図47 「リストのマチネ、1846」

グラーフ・ピアノに向かうリスト。譜面台の楽譜は、ベートーヴェンの「ソナタ・第18番」他。後列右はチェルニー、その隣はベルリオーズ。前列右は、バイオリニストのエルンスト、左はヨーゼフ。リストは「超絶技巧練習曲集」をピアノの師、チェルニーに献呈。LPは、リスト編曲、ベルリオーズの交響曲「イタリアのハロルド」（ヨーゼフ・クリュヒューバーの銅版画、LP、D.Ricordi、RCL27054、P 1980）



図48 「クララ・ヴィーグとシューマン, 1850」
リスト, タールベルグ, A・ルーピンシュタインと並ぶ, 19世紀最高の女性ピアニスト・クララは, 1839年(20歳) シューマンと結婚。ここにドイツ・ロマン派最強のカップルが誕生。リストは彼女に「パガニーニ大練習曲集」を献呈。
(ハンブルグでの銅版画, Burger: F. Liszt. Princeton Univ. Press, 1989)

[4] ジョルジュ・サンド つづき

(3) ジョルジュとショパンの出会いとその後

1836年, リストは, サル・エラールでベートーヴェンの「Pソナタ第29番, ハンマークラヴィア」を演奏した。当時このような事は, 極めて稀で, ベートーヴェンに対する尊敬の念の発現として, 特筆される。

36年, マリー・ダグーは, ジョルジュの客として, ノーアンにしばらく滞在する。その後, リストとマリー, それにジョルジュの3人は, パリのホテル・ドゥ・フランスに居を移した。

マリーは, ここに新しいサロンを開いた。

リストとショパンが出会って5年後の36年末に, このサロンでショパンは, リストにズボンをはいた3人の親子を紹介された。貴族趣味のショパンは, そのような服装には我慢できなく, いやな親子と感じていた。この3人が, ジョルジュ親子であった。

この時に, ショパンは始めて, ジョルジュ達の仲間に入れてもらえたのである。

この頃, マリー・ダグーにも紹介されたと思われる。

アンドレ・モーロワは著書「ジョルジュ・サンド(の生涯)」で, アバン・ギャルドな彼女とその家系を称えている。

早速ショパンは, マリー・ダグーに傑作「12の練習曲, 作品25」を献呈(37年)している。ジョルジュではなく, マリーにである。

(付録) ショパン自作曲の36~37年の献呈

ショパンは, 1838~47年の9年間もジョルジュと一緒に暮しながら, 生涯に1曲もジョルジュに作品を献呈していない。こんな失礼な事があろうか。信じ難い事である。ショパンの暗い性格を如実に示している。

36年: ショパンは, ポトツカ伯爵夫人に「P協奏曲第2番」, エスト男爵夫人に「アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ」を, ダボニー伯爵夫人に「2つのノクターン」を献呈した。その他2人の女性に献呈。

37年: ビリング男爵夫人に「2つのノクターン」, ロバウ伯爵夫人に「即興曲第1番」, フエルステンスタイン伯爵令嬢に「スケルツオ第2番」を献呈している。

ちなみにリストは, マリー・ダグーには「魔王」を含む, 12曲よりなるシューベルトの歌曲の編曲集「12の歌曲」, ジョルジュには「スペインの主題による幻想的ロンド」を献呈。更に, 同業者シューマン, メンデルスゾーンの夫人達にも敬意を払い, 前者(クララ)には「ラ・カンパネラ」を含む6曲の「パガニーニによる大練習曲集」, 後者(セシル)にはメンデルスゾーンの歌曲「歌の翼に」を含む7曲のピアノ編曲集を献呈している。

ショパンの敬意の対象が, 上流階級の婦女子に偏っているのが残念である。



図49 ノーアンでのジョルジュの仲間達
ジョルジュ、リスト、ショパン、ドラクロワらが描かれている。
(シャルパンティエの絵、1838年、西洋音楽史大系5、K.K.学研、1998)

(付録) 2枚のカリカチャー

図49は、38年にシャルパンティエにより画かれた、ジョルジュの仲間達のノーアンでの情景である。ショパンがジョルジュの仲間にになって、まだ間もない頃である。

中央がジョルジュ、その左に跪いているのがリスト、その後方がドラクロワである。

異国の赤い鳥に描れ、首輪をつけてジョルジュの腕に止っているのがショパンである。

ジョルジュの2人の子供達、左から二人目のゼフィリス（西風の神）がモーリス、右のライオンがソランジュである。右端の木に寄り掛っているのがシャルパンティエである。

多くの芸術家が集まり交流し、お互いにインスピレーションを得て、高めあったが、ショパンは、文学など他の分野の芸術家の影響を受ける事は全くなく、自己の音楽に没入した。

彼の音楽の源泉は、主に、生れ育った祖国で身に染み込んだ、騎士風の舞曲ポロネーズと郷土色豊かなマズルカ、それにノクターンであった。然し、晩年には、これらも含め創作力は枯渇してしまった。これらの曲を含めた曲の多くは、30年代末までに書かれたもので、40年代に書かれたものは、バラード第3、4番、即興曲3番、スケルツォ4番、ソナタ3番などに限られ少ない。

図50は、37年頃のデルフィーヌ・ド・ジラルダン夫人のサロンでの、作家達の午後の茶



図50 ジラルダン夫人の午後の茶会
ジラルダン夫人のサロンでの作家達の茶会。デュマ、バルザック、ユーゴーら作家達の中でピアノを弾くリスト。
(グランドウィルの絵、Suttoni: F. Liszt, The Univ. of Chicago Press, 1989.)

会の風景である。

女流作家デルフィーヌ（1806-1881年）の夫は、出版業者として廉価な新聞「ラ・プレス」を創刊。彼は新聞で広告料をとり、新聞の購読料を半額にするという、画期的方法を考案し、読者を増した。現代のネット社会などで広く応用されている方法の先駆者である。

この絵には、バルザック、デュマ、ユーゴーなどの作家が見られる。

デルフィーヌの右斜め下に、上を向いてピアノを弾いているのがリストである。

ロマン派の時代には、文学、演劇、オペラ等に関する検閲が厳しかった。為政者が、これらによる政治批判を怖れたのである。

思想として取り締まれない音楽は、パーティの口実ともなり、何よりも作家達の最大の楽しみでもあった。

リストは、このようなサロンでも最高の主役でもあった。ユーゴーもリストの生涯の友で、ピアノ曲「マゼッパ」を献呈された。ともかく、誰もが集まる事が好きだった。然し、

[隨筆・その他]

ショパンが、このような会に参加した事は聞かない。

(付録) リストとタールベルクの決闘

20世紀前半のパリには、綺羅、星の如くに、ピアニスト達が集まっていた。

リストとマリー・ダグーがスイスに滞在中の35-36年の冬に、パリで一人のピアニストがデビューした。

フンメル、カルクブレンナー、チャルニーラに師事したジギスムンド・タールベルグ(1812-71年)である。

タールベルグこそ「新しい芸術の創造者である」とパリで評判になった。

もちろん、自分こそ最高のピアニストと自負(実際その通りであるが)していたリストは、この時ばかりは対抗心を燃やし、タールベルグを支持する、高名な音楽理論家・批評家のフェティスとの間に「リスト・フェティ

ス論争」が起こりパリで最大の話題となった。

タールベルグやアルカンは、ロマン派の大ピアニストであるが、数十年前までは、ほとんど忘れ去られており、その復活には、多くの人々の努力が必要だった。

タールベルグは「三本の手を持つピアニスト」と呼ばれる奏法を考案。それを駆使しての演奏は、一般聴衆には、抜群の効果を示した。この時代は、音楽の大衆化が一層進み、演奏家にとって、大衆の人気、支持を得る事が、最も重要となっていた。

図51に、彼の「ドン・ジョアンのセレナーデとメヌエットによるピアノの大幻想曲」の楽譜の極く一部を提示する。

これを見ると、彼の「3本の手」の奏法の秘密が一目瞭然である(ト音記号の位置に注意)。彼は、広音域を記譜するため、それが必要な曲には、三段譜表も使用している。

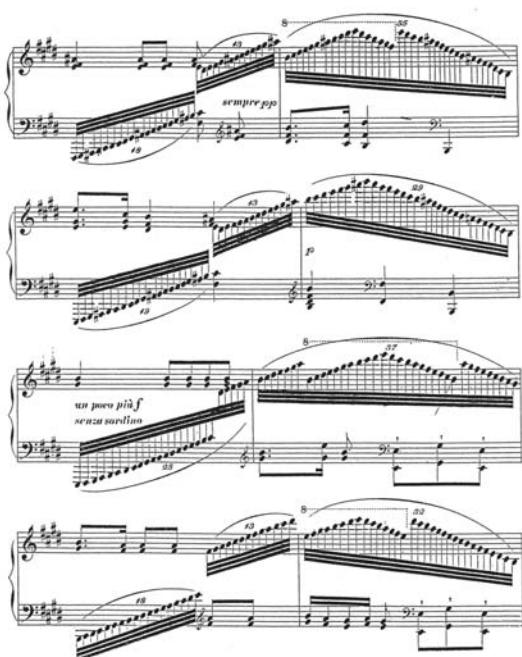


図51 「3本の手」をもつタールベルグの奏法の秘密
「ドン・ジョアンによるピアノのための大幻想曲」の楽譜の一部。ト音記号の位置に注意。

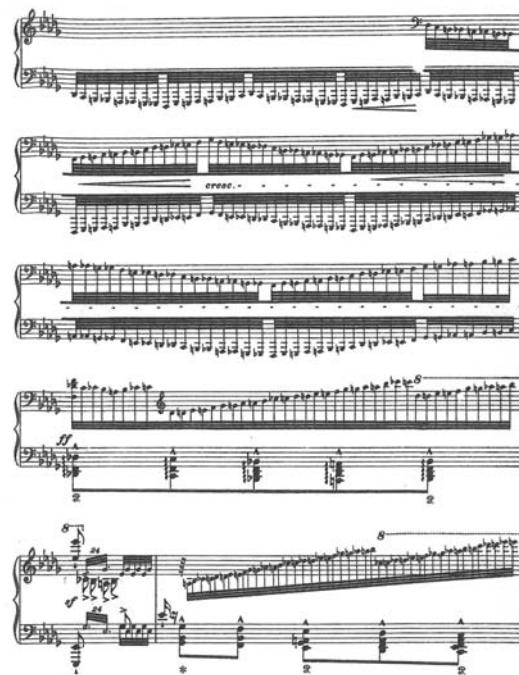


図52 リストの「超絶技巧練習曲集」の第12番の楽譜の一部

リスト、タールベルグ、アルカンらにより、ピアノの演奏技法は頂点に達した。

比較のため、リストの「超絶技巧練習曲集」(チェルニーに献呈)の第12番「chasse-neige」の一部も提示しておく(図52)。

ロマン派の時代にピアノの演奏法は、頂点に達した。模倣や競争から、演奏技法が向上するが、その原点はパガニーニである。

リストとタールベルグは、パリで各自が個人的にも演奏会を開き、その優劣を競い合った。ここにピアノ音楽史上、始めての、今でいうコンクールが開かれる機運が盛り上ったのである。

然も、このコンクールは最初から、二者による一対一の決勝戦であった。

この好機を逃さなかったのが、第一章で述べた「革命のプリンセス」ベルジョイオーソ侯爵夫人である。彼女は30年代始めから、リストの知人でもあった。

彼女は、37年3月31日、自分の邸宅でピアノ演奏史上、最も有名な「ピアノによる決闘」「象牙(ピアノの白鍵は象牙)の決闘」を企画したのである。

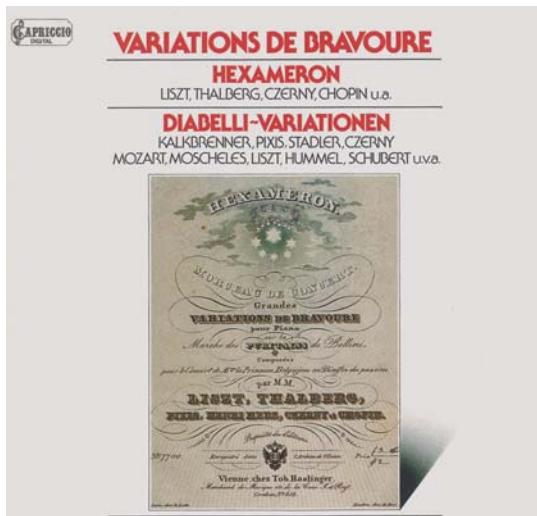


図53 「ベッリーニの清教徒による華麗なる大編奏曲、ヘクサメロン、1837」の楽譜の表紙

当時の高名な6人のピアニストの共作。リスト、タールベルグ、ピクシス、ヘルツ、チェルニー、ショパンの6人
(LP, CAPRICCIO, C27083, P 1986)

この日のために、パリの高名な6人のピアニストによる「ベッリーニの清教徒の行進曲による華麗なる大編奏曲、ヘクサメロン」が共作されるほど、パリ中が盛りあがった。

ベッリーニは、ベルジョイオーソのピアノの師であり、1835年に34歳で死亡した。

この時の6人は、リスト、タールベルグ、ピクシス、ヘルツ、チェルニー、ショパンである(図53)。ただし、この曲は当日には間に合わなかった(ベルジョイオーソに献呈)。リストは37年に、別に彼女にベッリーニのオペラの編曲「清教徒の回想」も献呈。

ベルジョイオーソのサロンには、デュマ、ハイネ、ミュッセなどが訪れ、文学的、政治的活動を行っており、3月31日には、貧しい亡命イタリア人の義捐のためのマチネ(昼の演奏会)も行われた。

破格の40フランの入場料であったが、観客数は200人にも及んだと言われる。

実際の二人の対決は、ベルジョイオーソのサロンで行われたが、タールベルグは「ロッシーニのエジプトのモーゼによる幻想曲」を弾いた。後半のアルペジオが美しい曲である。

リストは「パッチーニのニオベの動機による大幻想曲」を弾いた。

勝負は、両者に敬意を表し、優劣つけずに、「タールベルグは、第1のピアニスト、リストは唯一のピアニスト」と2人を称えて終った。

もともと音楽は趣味の世界であり、技術的に拮抗している場合、結果は、聴き手側の好みの問題に帰着するので、優劣をつける事自体がほぼ意味を成さない事は、明白である。

この事が、現代の音楽コンクールにも当てはまる事は言うまでもない。(付録おわり)

さて、話を元に戻そう。

36年、ショパンはリストに、ジョルジュ親子を紹介された。

37年1月には、マリア・ヴォジンスカとの

恋は終った。

38年になると、失意の内にいたショパンは、ジョルジュと急速に親しくなった。

同年10月には、ジョルジュは2人の子供を連れ（数日後にショパンと合流し）、ショパンの肺結核症状に対する転地療法も兼ねて、マジョルカ島に向かった。費用は「前奏曲集」のプレイヤーからの出版料（2千フラン）の前金などが当てられた。

当時の作曲料が分る。当時、バラード、ポロネーズなど、何でも1曲が5百フラン、24の練習曲集は千フランだったとも言われる。

作曲は、何か他に目的がなければ、高額なレッスン料に比し、割に合わない仕事だった。

マジョルカ島では、山麓の田舎風の家を借りた。当初は珍しい風物、温暖な気候を楽しんだものの、冬になると、豪雨、寒さ、湿気などの悪天候で、ショパンの持病は悪化、症状は進行、喀血も來した。

島民は、ショパンの病気を恐れた。

やむなくジョルジュー一行は、廃墟に近いヴェルデモーサの僧院に移る破目となった。

然しショパンは、極めて困難な状況下でも、代表作の何曲かを書くと共に、それまで書き



図54 ジョルジューのノーアンの荘園館

モーリスの水彩画。樹木などの陰影描写など対象をよく観察している。同様の表現は、図41のピアノに写るリストの手の描写にもみられる。

(C. Suttoni: F. Liszt. The Univ. of Chicago Press, 1989)

溜めてきた前奏曲の大部分を仕上げ、残りの数曲を作曲した。

39年1月に最後の1番を作曲したといわれる。ジョルジューの回想録による第6番、通称「雨だれ」は、既に作曲されていたと言われる。

そして39年には、無事にパリに戻る事ができ、幸い体調も改善。その後の数年間は、多くの傑作を書く事ができた。

43年には、ジョルジューは、ポーリーヌ・ガルシア=ヴィアルドをモデルに「コンスエロ」を書き、ショパンは彼女にピアノを教えるなど、よい時期であった（図54）。

(4) ジョルジューとショパンの破局

ショパンの症状は、43年頃から一進一退はあるものの安定していた。

ただ45年に「マズルカ、作品59」を書く頃から作曲のインスピレーションは枯渇し、作曲は、困難になってきたといわれる。

それでもショパンは、46年には「幻想ポロネーズ」をヴェイラー夫人に、47年には「3つのワルツ、作品64」の第1番（小犬）をポトツカ伯爵夫人、2番をロスチャイルド男



図55 デルフィナ・ポトツカ伯爵夫人

ポトツカ（1807-1877）は、音楽的才能に恵まれ、ショパンにピアノの指導を受け、終生の親友となる。（Wikipedia）



図56 ポーランド独立のために闘ったピアニスト・パデレフスキ、ポーランド初代首相

1860年、現ウクライナのクリウフカに生まれ、ワルシャワ音楽院卒業。レシュテツキー門下となり、世界的ピアニストになる。

1918年、ポーランド独立。19年、ポーランド首相としてパリ講和会議に出席。39年、ナチスのポーランド侵攻に対し、ロンドンで亡命政府の指導者となり、41年米国で客死。

このLPには、11～12年録音のショパンのポロネーズ、エチュード、マズルカ、ワルツ他、ショパン/リスト「乙女の祈り」、バガニーニ/リスト「ラ・カンパネラ」等が入っている。

(LP: Pearl, GEM140)

爵夫人、3番をブラニカ伯爵夫人に、「3つのマズルカ」をゾスノヴスカ伯爵令嬢に献呈している。なお「Pソナタ第3番」は45年にペルシウス伯爵夫人に献呈されている(図55)。

結核の危険も顧みず、家族で長年ショパンを支えてきたジョルジュには、前記の通り、この時期でも献呈なしである(このような事実を、伝記作家など誰も言及していない)。

才能もあり、強い意志、信念を持ち、大人らしく振る舞っていたジョルジュも、内心、面白くなく、プライドも傷つけられただろう。ショパンのデリカシーの無さには、ただ只あきれるばかりである。

ショパンの関心は、生涯、裕福で着飾った上流階級の婦女子にあった。

47年には、ジョルジュの家庭問題、つまり

ソランジュの結婚(ジョルジュは、ショパンに關らぬよう頼んでいた)にショパンが、深く介入するようになったのを契機に、二人は決定的破局をむかえた。

(5) ジョルジュとの破局後のショパン、晩年

付録で述べたように、48年2月、友人達の勧めもあり、6年ぶりの公開演奏会を、サル・プレイエルで開いたが、これが、パリでの最後の演奏会となつた。

その6日後の2月22日に、フランス2月革命が起つたのである。

サンドと友人の多くは、革命に参加した。然し、今回もショパンは革命を避け、イギリスに逃れる事となる。

ショパン自身、ポーランドの革命に巻き込まれたが、ポーランドが独立するのは、第一次世界大戦後の1918年の事である(図56)。

2022年2月、ロシアがウクライナに侵攻した。いつになれば、かけがえのない地球から戦争が無くなるのだろう。

「怒りの日」には、地上の全てが消滅する。

「怒りの日」の旋律が響き渡る。

Dies irae

Dies irae, dies illa,

Solvet saeclum in favilla:

怒りの日 その日は この世が灰燼に帰す日。.....呪われた者を烈火の中に落し給う時

私が選ばれた者として招き給え。.....涙の日 罪ある者は裁のため塵からよみがえる。万物の創造主たる慈悲深い神よ 彼らに安息を与え給え。Amen

(古来キリスト教世界の音楽で最も有名なこの旋律は、レクイエム等に広く引用されている。今回、そのごく一部を意訳した)

(つづく)